

## 新教育課程に向けての美術教育 1

# 「地域の特性を生かした図工学習」

## — 東金市立源小学校の実践より —

神 谷 睦 代

New Curriculum for Art Education 1

— Case Study of Togane City Elementary School —

Mutsuyo KAMIYA

2002年の新指導要領施行を目前に、情報社会に即した教科教育の在り方や、授業時数削減に伴う教科サバイバルの問題等、図工・美術教育界においても様々な論議が行われている。

本稿では、このような状況を踏まえて、新教育課程の基本方針「生きる力」の育成を念頭に、新たに設けられた総合学習の時間における他教科との連携という視点から、未来の図工教育への可能性を、東金市立源小学校の実践を検証しながら考察する。

### はじめに

平成14年の新指導要領改訂を目前に、美術教育界においても様々な論議が行われている。教科内容の同時代性の問題に始まり、創造美育協会の運動を中心とした戦後美術教育の総括。授業時数削減の果てにあるであろう教科サバイバル、そして新教育課程に沿う学校教育としての美術教育のありよう等。中でも、1997年から「美育文化」誌上で展開した「金子・柴田論争」は多くの現場の教員、研究者ら関係者を巻き込んでそれらの問題の所在を明確にするという点で大きな収穫があったといえるであろう。が、しかしこの論争からは「認識主義vs創造主義、合理主義vsロマン主義、美術派vs子供派」といった二項対立の図式が明示されたが、現在まで金子氏、柴田氏のどちらかに賛同するか、論争自体を不毛なものとしてみるか議論としては盛り上がったものの「袋小路な状況にある美術教育」に対しての具体的な打開策が未だ姿をあらわしはせず、論争そのものが異なる価値観によってひきさかれ混乱したまま空回りをしているようである。

両氏の主張はどちらも理に適うものとして捉えられ、相互補完的な位置付けも可能ではないかと思われるのだが、議論に向かいあう人々の言葉の解釈の微妙なずれからか二項対立の図式が生まれ、理論のための理論構築つまりリアリティのない机上論としての感が強い。例えば、「子供の表現の“自由”」や「現在の美術状況」についての見解は、常に問題の核心にも拘わらず多様な言説が交錯している。一方、“美術派vs子供派”あるいは、“現代美術vs伝統的な美術”等何の為の2項対立か、前者に対していうなら「美術を教えるということ」と「子供を大切にすること」とは決して対立概念ではないはずである。言葉が現実から離れて一人歩きをしている。そのような状況に非常に危惧を持っているというのが本根である。

新教育課程への移行期間に突入した今日、教育の現場では明確な理論を持たないまま図工学習は行われている。どうすれば現実的な視野に立った共通理解ができるのであろう。やはり実践の場に今一度目を見据え、ある具体的な活動を経る中で、冒頭に掲げたそれぞれの教科課題や問題に対して、事実として存在する教育効果や子供の様子を基に理論を立ち上げていくことが一つの突破口になるのではないだろうか。

そのような問題意識を持つ中、東金市立源小学校の図工学習を参観する機会を得ることができた。この地域の特性を生かした実践は材料の粘土を学校の裏山から採取して手づくりするところから始まる。またこの授業は千葉大学彫刻研究室との共同研究でもあった。

題材そのものは「彫刻」であり以前から行われている表現形式だが、現代の社会情勢に照らし合わせた切り口により教材研究が行われ、冒頭に掲げた今日的な教科課題に対して多くの希望的な観測を筆者に確信させた。

そこで本稿では、東金市立源小学校の実践を報告すると同時に、学習内容や取り組みについての検証を行い、21世紀の新教育課程に沿った美術教育の目指すべき方向を考察する。

### 東金市立源小学校での彫刻教室

この実践は、1988年の10月から11月にかけて、東金市立源小学校で5・6年生45人を対象に行われた。授業実践者は源小学校を母校とする千葉大学教育学部美術科教授上野弘道氏、アシスタントとして研究室の大学院生5人が参加した。

彫刻教室のねらいは、材料に用いる粘土を手作りすることを通して、地域の産業の理解（社会4年）、土の知識（理科3年）と他の教科と連携をはかると共に、可塑性を特徴とした粘土で感触を味わいながら造型活動を行えるように設定されている。以下が事前準備と彫刻教室の内容および作業のおおまかな流れである。

#### ○源小学校の様子

源小は東金市の上布田に所在し、豊かな緑に囲まれた環境にある。昨年創立125周年記念を迎えた。現在クラス数は各学年1クラス合計6クラスであり、規模は小さいが、ゆったりとした教育空間で

ある。

### ○事前準備

学校の裏山へ行き粘土採取の為の調査・焼成の実験 (千葉大院生による)

彫刻教室で、手作りの粘土を使用する為の事前研究が当時、小橋暁子千葉大学院生により行われた。東金粘土の成分、粘土の生成の順序、特に焼成については耐火性を得るため、子供達が採取した粘土に、テラコッタ粘土や信楽粘土を配合した上で、焼成実験を千葉大の窯芸窯でくり返した。その努力の果てに造型活動に適した粘土が誕生したのである。

### ○授業の内容

1日目(10月29日)

2日目(11月4日)

・上野講師による

彫刻教室についての講話

・彫刻とはどういうものか

・粘土の歴史、科学、産業

・粘土づくりの手順説明

・粘土採取、砕く、練る

・かたづけ

・今日やること

・「いっしょに遊んでみたい動物  
をつくろう」

東金粘土で作品制作

・かたづけ

#### ※歴史について (院生：小橋暁子)

模造紙に代表的な焼き物をコピーしたり、小学校の周りから出土した本物の土器を見せながら、小学校の社会の教科書(6年)を参考に、縄文土器・弥生土器・埴輪から奈良時代の奈良三彩、江戸時代、明治時代の有名な焼き物の説明が行われた。まだ学習していない5年生には解りやすいように、粘土で加工された日常的な品々(鉢や器など)を基に話を進めていった。

#### ※産業について(院生：丸本直希)

東金市の昔瓦の産業を紹介。地元で行われていた粘土産業について、瓦など実物を提示するとともに東金市史を拡大機で映しながら説明。

#### ※科学について (院生：韓智)

地面の成り立ちについて話をし、子供たちに地面の成分を発表させ、土・小石・砂・粘土等の答えを基に、今度は地層についての説明を行う。その際ペットボトルに土、小石、砂、

粘土水を入れ、子供達の前でシャッフルし実演。あらかじめ用意していたもう一つのペットボトルは、きれいな地層状態（シャッフルした後一日経過）になっており、地層の仕組みを目の当たりにした子供達は、非常に興味を持ったようであった。このアイデアは中国からの留学生韓氏によって発案された。

その他、乾燥した場合や水分を含む時と様々な粘土の状況を実物で示す傍ら、山の中に在る時の状態を解説し、売っている粘土はすでに多くの加工を経たものであることを確認した。

歴史・産業・科学についてのレクチャーは千葉大の院生が分担して行った。それぞれ子供達が解りやすいように、掲示物、見本となる瓦や、器や、焼き物製品。そしてペットボトルでの実演と工夫され努力の感じられる楽しい内容であった。

お兄さん、お姉さんといった親しみやすい雰囲気教室に流れており、また子供達に学生が一方的にレクチャーするような働きかけでなく、学生と子供達が共に学習しているという充実感が教室に満ちていた。

#### ○作業過程

図工室にて粘土掘りに入る前に粘土づくりの作業手順を説明する。

学校の裏でスコップを用いて粘土採取。採取した粘土には草や小石がついている場合があるので水洗いし、粘土版の上で木槌を使い粘土を割っていく（粘土は手でも割れる硬さ）。粘土を柔らかくなるまで練り、信楽粘土を混ぜて完了させる。

#### 流れ（1日目）

#### 留意点

粘土をスコップで掘る



粘土を水洗いする



木槌等を使って粘土を砕く



練る



◆採取場所が狭く、地盤がよくないので

掘ったものをその場で配る。

◆流水で草や根っこを流すが水分を多く

含む粘土はそのまま砕くか練りに入る

◆大きい塊の場合は手でつかめるくらいま

で砕いてから細かくする。

◆小分けして練ったり、力が入らない時は

叩きつけている子に目を向けさせる

◆焼く時に東金の粘土を強くするために混信楽土を混ぜる

ことを伝える

◆どの辺りまで練れば使い易いのかを伝え

「地域の特性を生かした図工学習」

粘土回収

ていく

- ◆自分の使ったもの、借りたものを元に戻し  
周りを掃除する

↓  
後片付け

↓  
次の時間に「一緒に遊びたい動物」をつくることを伝える

(2日目)

作業説明

- ◆焼き物にするので割れない方法を説明

↓  
粘土を使いたい分だけ

- ◆2ヶ所に分けておき、一気に集まっても  
混乱しないようにする

↓  
持っていく

↓  
制作

- ◆何を作っているかわからない子には、  
飼っている動物や好きな動物を聞いて  
みる

↓  
後片付け

- ◆作り終わらない子には、ビニールをかけ  
乾燥しないようにさせる

※後日、源小学校創立125周年記念くすのき展にて作品発表会が行われた。

\*一般に販売されている粘土は上記のような方法では造られてはいない。この手作り粘土の手順は、直に掘った粘土が焼きものの造形用として耐え得る範囲のものである。

○学習を通しての子供の様子

粘土採取では、裏山にのぼりスコップで、一人1～2キロの粘土を掘った。

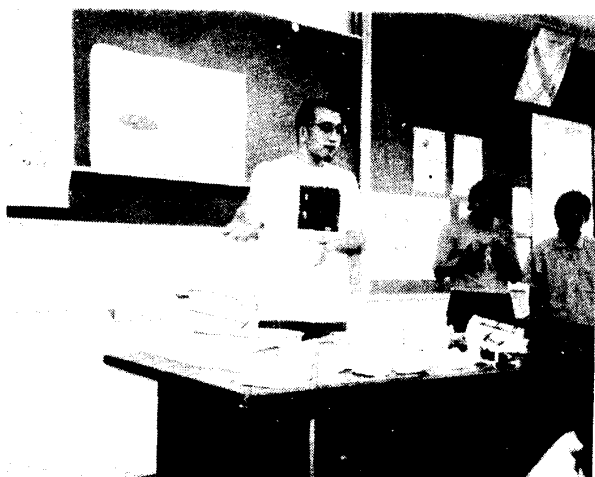
小石や砂を取りのけながらの作業で、手をどろどろにしながら子供たちにとってはかなりハードな経験であつただろう。裏山は足場が良いわけではなく掘る姿勢も考えながらである。が、口では気持ち悪いといいながらも懸命に粘土採りに励んでいた。その後採った粘土で直ちに練りに入った。まず硬い粘土を木槌で砕くことから始まったが、子供らは互いに硬さが違ったり、色やにおいが異なる等とお互いに指摘しながら活動を進めていた。練っている時はその感触が気持ちいいという子も気持ち悪いという子もみられた。この様子を見て楽しそうと飛び入り参加した4年生の子も現れた。これらの作業では全体的に粘土の感触や色や匂いや硬さに敏感に反応していたようである。



〔裏山から粘土を掘る〕



〔粘土づくり〕



〔学生によるレクチャー〕



〔自分の使う量の粘土を〕



〔学生との共同学習〕

※ 資料提供 東金市立源小学校

2 日目は、「一緒に遊んでみたい動物をつくろう」というテーマで、手作り粘土での造形活動となった。方法としては、手びねりの手法が上野講師により実演された。粘土は、子供たちが自分に必要な量を自由に持っていかれるようにとの配慮から、教室の2ヶ所に分散されて置かれた。内容については子供たちがイメージ豊かに表現できるように、教師や学生は、焼いた時及び乾燥の時にこわれないように接着時の“どべ”等の扱いを支援する立場から子供たちに接した。子供たちの活動中の関心は焼いたら部品がとれたり割れたりしないかという点に集中していたようである。

子供たちの作品は後日、乾燥の後千葉大学にて焼成。

## 実践の検証

### ◎自分で粘土を作るということ

源小学校の実践では、「材料の粘土を自分で作るということが第1のねらいであった」とこの授業の立案者である上野教授は述べている。図工の学習において、粘土は多く用いられる素材であり幼稚園でもお絵書きと並んで親しまれている。ところで粘土と一口にいても教育現場では油粘土、紙粘土は一般に頻繁に使われるが、粘土そのものは手入れや保存に手間がかかるということで敬遠されがちである。そして、ただでさえ手間のかかる粘土をわざわざ裏山から掘り出すという発想はかなり意表をついているといえるだろう。

なぜなら通常我々は図工の時間に使う粘土は業者から買えば済むことであり、表現活動の時間を十分に確保する為にも余分な手間・暇をかけることは一見不可解にみえる。しかし表現活動とは描いたり・作ったりする過程だけをさしているのであろうか。表現活動はどのような形態であれ素材との関わりからスタートする。夏休みの宿題用として工作キットが売られている現在、お膳立てされた土俵の上で子供達の自由やら主体性がどこまで発揮できるか疑問である。粘土も大体1キログラムずつパックされた状態で、企画商品として登場する。

そのような状況に対して自分で粘土を掘り、加工するという経験は子供達に材料との関わりかたを大きく変える出来事であった。苦勞して作った粘土で作品をつくる、素材にも思い入れが生まれその結果造型活動にも力が入る。焼成して完成した作品についても、楽しく表現活動してできたら後はゴミというような流れでなく（現場では、完成した作品の処理についての問題に悩む場合が少なくない。）大切に家に持って返って飾り、記念にとっておこうという気持ちが自主的に見受けられた。このことは、大量生産及び大量消費の使い捨てに慣れている社会に育つ子供達にとって、ものとの関わりや大切さを考える絶好の契機となったようである。

だが、実際問題としてこのようにすべての材料を手作りすることにも当然無理がある。しかしながら、題材によっては多少の困難が伴っても、材料そのものに焦点をあてて“ものづくり”の根本を問いなおす実践は、造型活動を通して「意識に深く刻みをいれる」という芸術の持つ本質的な意味からも、便利で不自由なく生活する現代人にはそれゆえに今後ますます必要不可欠な学習であ

ろう。

### ◎彫刻という表現形態

現在の美術状況は非常に複雑である。造型活動の内容を同時代性という観点から見直した時、「やはり今の時代にリアリズムの描写が必要とはいえない」とか、「彫刻や工芸、デザインと分類された表現形態は古い」などといった意見がみられる。“現代的な美術vs伝統的な美術”というような図式も生まれる。だが、様々な表現形態があるのなら、逆にそれぞれの特色やよさを拾い上げるような取り組みも可能であろう。「AかBでなくて、AもBもやればいいのである」<sup>24</sup> とはいえ、授業時数削減の状況では、すべてを網羅することは当然不可能である。そこで、「AでもBでも、できることからやる」ことにしたらいかがであろう。

筆者の過去の実践を例に挙げて説明する。敬愛短大で小学校の教師を志す学生に、図工の時間に鉛筆で描く自画像を始めとして、風景画、漫画的なイラスト、平面構成、抽象画、アクションペインティング、コラージュと平面でできるあらゆる表現方法を、背景にある理論的探究を説明しながら順に行っていったところ、興味を示す題材は学生によって異なった。つまり、リアリズムを好む学生もいれば、アブストラクトに熱中する学生もおり、感想を尋ねたところ、「一口に絵といっても色々種類があることが分かった」「自分は描写は苦手だが、これならできる楽しい」とアクションペインティングに夢中な一人が答え、一方では「分けわかんない模様より具体的な形を追求したい」と風景画に集中する学生がつぶやいた。いずれにしても20世紀に入ってから表現の範囲が拡大したため自分にあった表現法が見つけれられたようであり、何よりも絵を描く行為に興味・関心を持つようになったのが大きな成果であった。この例から言えることは、表現の自由はある一つの表現形式あるいはある限られた範囲の中では語れないということであろう。現実として伝統的な表現方法も現代的な表現方法も混然として存在しそれぞれに表現を深めている人たちが存在することは否定できない。「ひからびた美術」であるかないかは表現形式ではなく、形態や内容に現代性が反映されているかどうかによって判断すべきではないだろうか。誤解ないように念をおすが、現代性を反映するとは、日本画はだめでCGならよいと言うわけではない。(驚くべき事実として美術教育に携わる専門家の中でもこのような古い新しいというだけの直線的視野しか持たない者が存在する。)つまり、近代のリアリズム的な表現形式でも現代的なアブストラクトの形式でもさらにCGにおいても、要は内容と方法(とりあげ方)にある。そのように考えれば、近代リアリズムを美術の時間に行うとマニュアルとおりで技術主義に偏るという見方は一方的な角度に過ぎない。また「美術を教えること」が即「子供を内的世界を否定すること」にもならないであろう。確かに危険性はある。だからこそ、あくまでとりあげ方なのである。逆にそのような理由で近代のリアリズムを消去してしまえば鑑賞の側面から見ても「芸術知的」な美術に感覚を通しての接触は望めないだろう。

源小学校の実践は偶然裏山から粘土が採れることに着目して彫刻の授業が設定された。同時代



性という視点では、造型活動のなかでも“時代の要請に合わせたものづくり”に大きくねらいが定められている。また、異なる角度からみれば、情報社会に踏み込んだ今日、インターネットやテレビゲームでデジタルな視覚経験に偏る子供たちにとって、土という一次素材に触れての生きた感覚を通した活動となったであろう。

現代の範囲拡大された美術状況を背景にして、教材の選択に対しては特に意見の別れる箇所である。それは美術が自身の概念を自己否定しながら今日までたどり着いたといった美術史的な見解と一つ一つの表現形式を深めていくという美術の持つもう一つの側面が対立しているせいであろう。筆者の考えではどちらの方法で美術にアプローチするかはそれこそ表現者の自由であると思われる。大切なのは、どのような表現活動であろうとも「現代の地平から問う」ことなのだ。そこで美術教育ではいずれのアプローチの方法をとったとしても“何をやるか”という視点から、まずはできることを“どのようにやるか”というような視点をもつことこそが肝心といえるだろう。

#### ◎他教科との関連

新教育課程では、図工の授業時数が削減される一方で、週3時間の総合学習（中・高学年）が新たに設けられた。図工は造形活動中心の為、準備や後片付けにも時間が必要であり、新教育課程の時間配分はかなり厳しいと思われる。しかし、総合学習の時間に他教科と連携しながら図工学習を行うことも可能である。そのためには、図工の教科特性を生かしつつ他の教科と重なる内容の題材開発が大きな課題として目前に迫っている。源小学校での実践は、彫刻という美術の特性を主張をしながらも、「地域の産業の理解（社会4年）」「土の知識（理科3年）」と他教科との連携に成功している。また、他の教科と組むことで、生活や社会に接点のある図工学習となった。現代の美術が、人間の存在や生活に結びつく方向において語られようとする昨今、総合学習の中での美術教育の位置付けは美術を通して生きることを豊かにする場の再創出となり得るに違いない。

ところで、このような総合学習では、図工のもつ具体的な教育内容が逆説的に求められるともいえる。子供の思いを尊重することに異論はないものの、「子供の可能性や主体性に任せる」といって、ただ自由にやればいいというような明確な方向付けのない内容では他教科との合同授業は成り立たないであろう。教科サバイバルの問題はこの点にかかっていると考えられる。

#### ◎新指導要領の観点から

本稿の、「地域の特性を生かした図工学習」という表題は、まず地域の特性（地形や産業）に注目するという社会的な視点。さらに新教育課程改訂の方針の中にある「④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。」という項目を含んでの所以である。すなわち新教育課程に照らし合わせて、地域や他の教科に開かれた図工学習を念頭においてのタイトルといえる。本稿を書き進めるうちに気づいたことだが、これからの美術教育は「教科美術（図工）」

のための方法論というより、「生きる力」を育成するという教育の基本的なねらいを背景に、さしあたっては「総合学習」の中での美術教育という視点からの教材研究や実践力がより求められることが予想される。

#### ◎大学と教育現場の共同研究（子供の立場から・院生の立場から）

源小学校での彫刻教室が開かれた経緯は、小学校の125周年記念行事に端を発し、もと卒業生である上野教授が「ようそこ先輩」よろしく図工学習の講師として招かれたところに始まる。そして、この機会を将来教育者を目指す学生達にとっても、又とない生きた研究の場として活用できたらという上野教授の考えから、結果千葉大学美術科の学生も参加しての授業が実現化した。

平成11年度、大学美術教育学会（愛媛大会）の美術教育フォーラムでは、「現代社会がもたらした学校教育現場の変貌や緊急の問題を真摯に受け止め、社会や教育現場の要請に応えうる教員養成の在り方を再考する必要がある」と実践力のある教員養成の問題をとりあげている。実践力は経験なくしては養われないゆえ、具体的な方策として最良なのはやはり現場での授業実践であろう。今後、教育実習のみでなく、このような学生と子供たちが共に学べる機会を率先して設けていくような働きかけが必要と思われる。

源小では、子供たちは学生との触れ合いも思い出として強く印象に残ったようである。学生も、身につけた知識や技能が実践を通して具体化し、反省点を改良してさらに実践をくり返す中で何より僅かながら自信がついたと語っている。

いじめや学級崩壊等、子供たちの心の問題が緊急課題として在る今こそ、学校と大学の共同研究は子供や学生両方の立場から、閉じられた空間を突き破り多くの人と触れあう場所を設定する上でもその果たす役割は大きい。

さらに、以前現場の先生方にアンケートをお願いしたところ、大学と学校の接点が少ないという、解答が多く見受けられた。お互い忙しい立場や場所柄、あるいは移動の問題などで、共同研究による授業及びに教材開発は困難ではあると思うが、大学と現場の一致があった上での美術教育である。大学の付属的機関はもとより今後は地域に大きく乗り出す方向で、まずは共同研究を行うための努力をすることが先決であろう。

#### ◎表現と鑑賞の相互性

柴田和豊氏は「鑑賞教育重視の風潮をめぐって」<sup>註5</sup>によって、指導要領における表現と鑑賞の記述を巡って問題提起を行っている。筆者は氏の「表現を基軸から外すような感じを与える記述をしてよいのか」「表現か鑑賞かという二者択一を助長するような書き方をしていないか」<sup>註6</sup>という違和感に対して同様の感慨を持ち合わせている。そして、「美術教育は豊かな感性と知性に裏打ちされたよき教育方法を求めている。鑑賞活動も又

子供達が表現者として自立していくことを支えるべく、存在しているので在る。」<sup>註7</sup> という考えに賛同する。

以下は源小彫刻教室の作品を展示発表した「“くすのき展” 作品・感想文集」によせられた子供達の作文である。

「5、6年生は源小学校でとれた粘土を使い自分と一緒に遊びたい動物を作りました。粘土をつくるまでにはとても大変でした。これを教えてくれた先生は上野先生です。みんなのとてもいい作品をいろいろな人に見てもらえて、これも私にとっていい思い出だと思います。文化会館の会場はとてもいい感じでした。そして一人一人の夢、自分の作品がかざられてありとても最高でした。」

(6年・女子)

「手がどろだらけになっても頑張った粘土も展示されていました。ぼくはカメをつくりました。校長先生が写真をとってくれました。来年もくすのき展をやりたいです。」

源小では、創立125周年の記念事業の一つとして書道と彫刻作品展“くすのき展”(書道は全学年、彫刻は5・6年)を東金市文化会館のホールで開催した。地域に開かれた形でおこなわれ理想的な舞台ともいえる。展覧会をみた保護者や授業に参加した学生からもよせられた感想や意見が文集には載せられており、こどもたち、先生、学生、保護者、そして地域と学校が一体化してのまとめが記録として残っている。

「教育の主体はこどもにあるか教師にあるか」<sup>註8</sup> という議論も記憶に新しいが、教育とは皆で、子供も、大人も、関わる人すべてがづくりあげるものということを新たに認識する結果となった。

さて、鑑賞の話に戻るが、子供達の作文からも読みとれるように、表現活動あつての鑑賞である。授業時数削減は避けられなく、とりわけ中学美術では準備と片づけで作業の時間も中途半端だが、その点鑑賞教育は手軽にできるといって便宜上領域をわけての捉えかたをする可能性がないわけではない。知識からの美術へのアプローチは統べて否定しないが、経験に裏付けされた感性が土台になり限り期待されるような鑑賞教育は実現しないであろう。それこそ「ひからびた鑑賞教育」になりかねない。したがって、単純に、表現活動に時間を割き過ぎたから、こんどは鑑賞表現に多くの時間をかけようという展開でなく、「豊かな鑑賞教育を行うための用意」という点からも表現活動の見直しを図らなくてはならないだろう。

## 新教育課程に向けて：未来の美術教育（まとめ）

上野教授は「くすのき展作品・感想文集」によせて、

「『粘土を造る』ということは陶芸家や彫刻科を育成しようというわけではありません。身近なところから、物事の成り立ちを知ってもらおうという事です。家庭科の授業でパンを焼いたりするのも、パン屋さんを育てるものではありません。勿論、陶芸や彫刻。あるいは食品加工に関心をもってもらうという狙いもあるでしょうが、私は社会や物事の成り立ちを知ることの方が大切だと思います。」

と語る。この言葉は21世紀に向けて羽ばたく子供達に「生きる力」（方針に於ける②自ら学び自ら考える力）を育成するための具体的な方策として受け取れる。

平成14年から実地される小学校学習指導要領図画工作編おける改善の具体的事項の一つに

「(イ)「表現」の領域については、多様で創造的な表現を促す観点から現在低学年と中学年において指導することとしている、材料などをもとにして楽しく造型活動を行う内容を、高学年でも指導することとある。また絵に表すことや立体に表すこと、つくりたいものをつくることの内容を一層関連付けたり一体的に扱えるようにする。」と記されている。

源小学校の彫刻教室は、21世紀の新教育課程の示す教育の方向と大きく重なる実践としてこれからの美術教育の期待される一つのモデルケースといえよう。このような試みが数多くなされれば美術教育は今の状況から大きく前進できるのではないだろうか。

今後、学会活動の中でも、現代の教育的要望に合致した内容を持ち合わせる実践例を募りそれらの報告をベースに現実や事実に基づいた具体例のある美術教育理念の構築を切に希望する。

## 終わりに

現在、源小学校では昨年の粘土造りの授業に引き続いて、ダイオキシン問題によって使用されなくなった焼却炉を図工用焼きもの窯として再利用する試みが進行中である。上野教授指導のもと大学院生が中心になって実験がくり返されており、共同学習も同時に行われている。環境問題を強く意識した授業展開であることは言うまでもない。

「どうなる美術教育」というタイトルの特集記事を以前みかけたが、問題提起に終わることなく「どうにかしよう美術教育」という気持ちを起動力に、あとは“安ずるより産むが易し”実際に活動することから可能性は開かれてゆくのである。源小の彫刻教室はそう教えてくれている。美術とは本来、創造的な存在ではなかったか。

末筆ながら、本稿を書くにあたってご助言いただいた千葉大学の上野教授、お忙しい中協力して下さった源小学校藤田実校長先生、そして千葉大学彫刻研究室の小橋暁子さん、心より感謝いたします。

注

- (1) 「戦後美術教育の継承と超克-「金子・柴田論争」が示したこと-」長沼守樹（美育文化1999年1月号）  
P.10～19
- (2) 千葉大学修了研究報告書「粘土－学校と地域をつなぐ教材としての可能性と焼き物粘土による立体造型」  
小橋暁子。  
小橋氏はまた、東金粘土によって自らの修了制作も試みている。
- (3) 「座談会：今の美術教育に何が求められているか。」における、森村泰昌氏の言葉。  
（美術手帖770号1999年5月号） P.109
- (4) 朝日新聞平成11年10月16日：「『ものづくり大学』誕生？」参照のこと
- (5) (6) (7) 「鑑賞教育重視の風潮をめぐって」柴田和豊（美育文化1998年10月号）P.16～25
- (8) 「鼎談：戦後美術教育における“創造主義の再検討”金子一夫・柴田和豊・藤沢英昭（美育文化1997年10月号）
- (9) 特に情報社会を強く意識しての美術の表現活動について表現及び鑑賞が相互補完的な位置付けにある題材は拙稿を参照の事「情報社会における表現活動－立体表現－」  
上野弘道・神谷睦代共著（情報社会における美術教育の可能性－第3次報告書－  
平成10年10月新教育課程検討特別委員会） P42～47

引用文献

- 「小学校学習指導要領解説図画工作編」（日本文教出版1999年5月）
- 「源小学校創立125周年記念くすのき展作品・感想文集」（源小学校編 1998年）

参考文献

- 「美術と教育・1997」中村政人企画・構成（白石コンテンポラリーアート、  
1997年10月）
- 「アートエデュケーション NO.29-特集美術教育で受け継がれるもの世代を通しての試み-」  
（建帛社1999年3月）